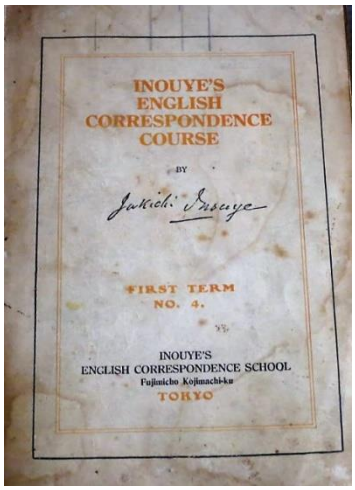
2020.2.26.
T.Kobayashi

五番町人物往来

昭和 31 年だっただろうか、我が家は東京の住人になった。父が、母のいとこの旦那さんが経営する会社の世話になることになり、その会社の敷地内にある社宅と称する家に住むことになった。
一戸建ての家の二階の6畳間が我が家で、一階の6畳間には同じ会社に勤める三上さん家族が住んだ。
隣の建物は印刷工場で、その隣に新井さん家族が住んでおり、敷地の反対側には社長宅があった。

＜第一部＞

母のいとこの旦那が経営する会社は、英語・ペン習字・高等学校などの通信教育を営む会社で、社長は柴山格太郎氏と言い、明治時代の英語学者の井上十吉の甥だった。
井上十吉は、文久 2 年（1862 年）阿波国徳島藩の生まれで藩命により江戸へ出て慶應義塾に学んだ。
卒業後、旧藩主蜂須賀氏が選抜した 7 名の一人として英国に渡りロンドン大学に留学。同大学で冶金学を学び、帰国後東京大学などで実験助手を務めた。その傍ら学習院などの英語教師となり、明治 27 年（1894 年）に外務省の翻訳官に転じ、公使館書記官として多くの国に駐在した。大正 7 年（1917年）退官して著述に専念し、日本初の英語辞典「井上英和辞典」「井上和英辞典」などを編纂した。昭和 4 年（1929 年）67 才で他界。



井上十吉の英語を核とした英語の通信教育が「井上通信英語学校」、創設は大正 13 年(1923 年)。（左画像：インターネット上で見つけた教本の画像）
昭和 10 年（1935 年）には書道の通信教育として日本書道学院も開始した。
昭和 7 年（1932 年）に日本ペン習字研究会を開設してペン習字の通信教育を開始。創立時の会長を務めたのが書家の井上千圃氏。この人は大正時代後半から国定教科書の字体を定めることに貢献した人で、木版の版下作りまで一手に引き受けた。やがて昭和に入って改定された教科書字体のベースを作った。
また、戦後の復興の中で優れた人材の育成が必要との考えから昭和 21 年に東京高等文化学園を開設。まだ中学校を卒業してすぐに働きに出る若者が多かった時代に高等学校の通信教育という場を作った。
昭和 35 年（1960 年）にこれらの機能の基盤として、経営主体「株式会社学文社」を設立、これが現在の総合通信教育事業の「がくぶん」に繋がっているらしい。
（参考情報 https://www.gakubun.co.jp/lecture/ ）
柴山格太郎氏は、明治 34 年（1901 年）に京都で生まれた。初代徳島市長を務めた井上高格の曾孫にあたり、父親が柴山家と養子縁組をしたことから柴山姓に変った。井上千圃との関係を調べたがわからなかった。しかし、井上千圃の本名が井上高太郎であること、井上高格という名前、柴山格太郎という名前、何らかのつながりがあるような気がしてならない。柴山格太郎氏は、前述の様な経歴を経て 2005 年に 104 才で天寿を全う。
藤沢市の大鋸（だいぎり）緑が丘というところにも自宅を持っており、毎年夏休みに「海水浴」と称して従業員と家族を自宅に招いてくれた。社有車も繰り出して社員家族を乗せて、ワイワイ騒ぎながらの日帰りの慰安旅行だった。まだまだ自動車の一般家庭への普及にはほど遠い時代に、Buick という外車に乗せてもらったことを憶えている。戸塚から藤沢へ向かう旧東海道の松並木を東に入った高台の頂点のようなところに家があった。片瀬の浜で遊んだ後、和風の豪邸の広い庭園のような庭を解放して一日中遊ばせてくれた。旧東海道を海に向かって下る途中にある遊行寺というお寺を教えていただいたのもこの時だった。
柴山格太郎氏の妻ちか子さんは、私の母の母方のいとこで明治 40 年（1907 年）に仙台市で生まれた。
昭和 6 年（1931 年）に結婚。のちに藤沢市の自宅の敷地内に緑ケ丘ユースホステルを開設。ワンダーフォーゲルやユースホステルが日本に入ってきた時期に、その先駆けとなった。後年絵を描き、歌を作り多方面で活躍された。母は、5 才年上のいとこを「ちかちゃん」と呼んでいたので、かなり仲良しだったのかもしれない。1997 年 7 月に90才で他界。

＜閑話休題＞

様々な記憶が蘇ってくる内に藤沢へ行ってみようかなと思い立ち、2 月 20 日突如日帰り散歩に出た。

船橋から総武快速・横須賀線で戸塚まで行き、ここでホームの反対側の東海道線に乗換えれば二駅で藤沢。

駅前で軽く昼食を済ませて戸塚バスセンター行のバスに乗る。駅前の繁華な町を何度も曲りながら走ると境川を右手に見るようになり、やがて藤沢橋。この辺りが旧東海道の藤沢宿があったところ。右折して旧東海道に入るとすぐに遊行寺坂の長い登りが始まる。坂を登り切ったところが緑ヶ丘。65 年前には旧東海道の両側には土手があって、その上には松並木が走っていたのだが、松はポツンポツンとしかなく、代わりに桜が植わっていた。土手の縁ぎりぎりまで家が建ってしまったが、路地に入る角の土手は切り通しのようになっていて、昔のままの雰囲気が残っていた。

切り通しを抜けて、地図を片手に昔の景色を思い出しながら一本の路地に入った。小刻みに切り売りされて宅地開発が進んだせいだろうか、道は右に曲がったり左に曲がったりを繰り返す。やや広めの公園（外原公園）が現れると、その向かいの大きめの家の表札が「柴山」となっていた。その周辺をぐるりと廻ってみると、もっと大きな和風の黒塀に囲まれた邸宅が目に止まった。表札を見ると「柴山・高橋」と二つの名前が表示されていた。塀の隙間から覗いてみると、和風の家屋と手入れされた庭が見えたので、ここが昔海水浴に来たときに遊ばせていただいた庭のようだった。

風格のある門構えの向かい側の高台の縁に黒塗りの風変わりな建物が建っているのが気になった。軒先に入って見たら「東京高等文化学園生涯学習研究所」と書いてあったが、人の気配は感じられなかった。

帰り道で旧東海道を遊行寺まで歩いて見た。切り倒された後の切株が何本も残る松並木の一隅に「旧東海道松並木跡」という石碑が建ち、画像入りの説明看板が建っていた。

長い遊行寺坂を下った右側の山に貼り付くように、時宗総本山遊行寺があった。正式な名称は清浄光寺（しょうじょうこうじ）と言う。一遍上人が「南無阿弥陀仏」の札を配りながら全国各地を遊行したことから遊行寺と言われるようになった。風格のある堂宇がいくつも建ち並び、隅から隅まで見歩こうと思ったら半日では済まなそうな広さだ。

藤沢駅に戻って一休みの後構内を物色していたら「大船弁当　鰺押し寿司」の看板を見つけたので、土産に買って帰った。少年時代回顧の散策・日帰り旅も悪くないなと思いながら東海道線に乗り込んだ。

＜第二部＞

社宅の一階に住んでいた三上さんは、夫婦と小学生の女の子の三人家族だった。我が家は両親と男三人女一人の四人兄弟の計 6 人家族で、三上家は正反対の静かな家だった。女の子の名前は尚子ちゃんと言い、おとなしい子だったようにおぼえている。

中学校を卒業した春休みにこの会社でアルバイトをすることになり、毎日社内の実景を目にしているうちに、色々なことがわかってきた。三上さん夫婦も我が家の両親同様に、この会社で働いていた。三上さんは、いつもペン習字の課題を提出してきた生徒の作品の添削をしているようだった。

実は三上さんは、三上秋果と言う名前のペン習字の先生だった。物静かな作家のような風情の近寄りがたい人だったが、奥さんはそれとは正反対に、小柄ながらきびきびした身のこなしと、はきはきした物言いの人だった。私の母は、三上さんの奥さんを奈美子さんと呼んでいた。

そんな記憶を頭の片隅に残して時が流れた。定年退職後の暇な時期にインターネットで様々な情報を漁っていたとき、日本ペン習字研究会・三上秋果などの情報を見つけた。

「平成 17 年（2005 年）4月に 90 歳で亡くなった」という情報があり、逆算すると明治 42 年（1915 年）生まれだということがわかった。「昭和 11 年からペン習字教育の道に入った」とあるので、創設間もない日本ペン習字研究会に入ったようだ。「三上流ペン習字」とか「三上流ペン書道」という表現が随所に記されているので、どうやらこの世界では相当の方だったようだ。教え子達が各地で会を組織化して、現在でもその流れが続いている

らしい。そのいくつかの会のひとつである秋華会が 2008 年に開いた書作展の参加者リストに「日本ペン習字研究会前会長 故三上秋果先生 同令夫人 故三上奈美子様」とあり、そのさらに下の方に「秋華会幹事 三上尚子」と載っていた。
三上さん一家は数年後に社宅を出て、祖師ヶ谷大蔵の都営住宅に引っ越していった。
（左画像：インターネット上で見つけた三上秋果氏の生前の画像）
隣にある印刷工場は朝から晩まで印刷機がパッタンパッタンと音をたて、いつも窓からインクの臭いを漂わせていた。工場の二階には活字が入った棚がずらりと並んでいて、文選の作業が行われていた。原稿を見ながら活字を拾っていくベテランのおじさんが凄くかっこよく見えた。
工場を取り仕切っていたのが新井さんというおじさんで、柴山さんの厚い信頼を受けて一切を任されているという感じだった。名前は新井勇さんと記憶しているが、ランニングシャツと白い半ズボン姿の丸坊主の気さくなおじさんで、埼玉県の秩父出身と言っていた。奥さんは、三上さんの奥さん、我が家の母とともに、この会社の事務方をしていた。母はこの人を「澤子さん」と呼んでいた。

男女一人ずつの子どもがいて、長女は茂子ちゃんで私の一才上だったように憶えている。目鼻立ちがしっかりしていて外見的には目立つ女の子だったが、1959 年に東映の第６期ニューフェースに合格して女優（新井茂子）になった。千葉真一・太地喜和子などと同期で梅宮辰夫などにも可愛がられたという話を聞いたことがある。インターネットで調べてみたら、「1970 年に俳優の中田博久という人と結婚して、1972 年に出産を機に芸能界を引退」と書いてあった。（右画像：インターネット上で見つけた新井茂子の画像）
弟のみのちゃん（実）は、近所でよく一緒に遊んだが、大人になってからのことはまったくわからない。
新井さんの下で働く若者の中に早川君と呼ばれる実直そうな青年がいた。夕方仕事が片付くと定時制高校へ通っていた。話しやすい雰囲気を持っているお兄さんで、しばしば雑談の機会が得られた。
ある日、出身地（つまり田舎）を訊ねたら「栃木県足利郡御厨町」と教えてくれた。「御厨（みくりや）」という難読地名を文字に書いて教えてくれたので、この地名はその後もずっと忘れることはなかったが、「御厨」が「荘園や神領などで神に供えるものを用意する所」という意味を持つことは知らなかった。
社有車の運転手をしている佐々木さんという青年がいた。今風に表現すると「イケメン」となるのだろうかという感じの青年で、若い女性は結構注目していたようだった。
柴山格太郎氏一家は同じ敷地内の自宅に住んでおり、ちか子夫人の母親つまり私の母から見ると叔母にあたる人が同居していた。名前は中目玉寿（なかのめたます）と言い、上品さと優雅さと気品に溢れる穏やかな顔つきと人柄で、いつも柔らかな微笑みを見せている人だった。

＜第三部＞

ここまでの世界が存在していた場所は「千代田区五番町 14 番地」で、西側に江戸城外濠が走り、その下を中央線(当時は国電と言った)が走っていた。東側には東京中華学校があり、中国人の子ども達が通っていた。学校の敷地の中に住んでいる用務員は日本人の怖そうな顔のおじさんで、一才年上の国ちゃんという男の子とすぐ仲良しになった。加藤国彦という名前だったように憶えている。下校時刻が過ぎた校内に入らせてくれて、遊び場としては最高だった。校舎の中には蒋介石か孫文かの肖像写真が飾ってあった。
風邪をひいて学校を休んで寝ている時には、窓越しに聞こえてくる中国語に耳をそばだてた。ラジオ体操が始まると「一、二、三、四（イ・ア・サン・ス） 二、二、三、四（ア・ア・サン・ス・・・・」と声を出すのが聞こえてくるので、中国語の数字の数え方はすぐに憶えてしまった。
国ちゃんは中学生の途中で秋川の方へ引っ越していったが、お父さんが定年退職だったのだろうか。
東京中華学校への出入りに使っていた裏口の扉の脇に家が一軒建った。川島さんという若い夫婦で、三才ぐらいの可愛い男の子がいた。三輪車で近所を動き回っていたので、しばしば声をかけていたらすぐに気を許す仲間の扱いをうけるようになった。この子ももう還暦を過ぎて過去を振り返る年齢になったんだろうなと思うと、一方的に流れ去っただけの筈の「時」が生き物のように感じられてきた。

以上